
君の手を

きみよし藪太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の手を

【Zコード】

N3791Q

【作者名】

きみよし敷太

【あらすじ】

僕らは付き合っていたわけではなかった。

今日君は別の男と結婚する。

最後の悪あがきは、格好悪くて。でも。

十四時五十五分少し過ぎ。

ゆっくりと流れ出したスロー・テンポの曲に、会場内のざわめきが途絶える。結婚式の余興で、いきなり前に出た人達が輪を作ったから驚いたのもあるのだろうか。前奏の部分が終るところで男性が女性の後ろから寄り添うように手を取つてよ、と伝えてあり、僕もそろしょうとしたところで最初のパートナーがこっそり囁いた。

「でもや、凛子は絶対、のり君だと思ってたのに」

先ほどのテーブル席でも他の仲間から口にされた話題で、僕は思わず苦笑する。

「そんなことないよ、だつて別に付き合つてたわけじゃないし」

「あんなに仲良くて、付き合つてないとかおかしいもん、」

「あ、ほら始まる」

やわらかな歌声はキーが高めの男性ボーカルのもので、それは凛子が一番好きだとよく言つていた曲だった。僕らは大学のフォークダンス同好会、というふざけた名前のサークルに所属していた同期で、入学から卒業までずっと在籍していた男四人女五人はそれが社会人になつた今でも仲良く交流している。サークル内でも二組のカップルが既に婚姻関係にあつて、彼らの結婚式の時にも余興で僕らがフォークダンスを踊つた。しかしそれはオクラホマミニキサー・やマイムマイムなどの有名なものではなく、好きな曲にフォークダンスっぽく自分達で振り付けをした、オリジナルのものだつたけれど。

右足、右足、左足、右足、男性が手を添えて右回りで女性をターンさせ、右足、右足、左足を軸に円の内側へ女性が大きく傾いて手を伸ばし、倒れ込まないよう男性がその手をしっかりと支え。

「でも凛子は絶対のり君のこと、」

パートナー交代の時に、早奈江はふてくされたように僕へだけ聞

こえるようにそう言った。田宮にも同じことを言われたよ、と、僕

は彼女の旦那になつた同期の名前を告げる。そしてそのまま次のパートナーに、僕は後方へ、彼女は前方へ進んで入れ替わった。

右足、右足、左足、右足、女性のターンで。

僕もそう思つてた。

口にできずに僕は軽く俯く。今日のダンスは僕の振り付けだ、凛子のために在学中、僕が作ったダンスだつた。僕も思つてた。凛子とはいつか付き合い出すんじゃないかと。僕らは相性も仲も良くて、いつでも一緒にいた。誰もが僕らを付き合つていると勘違いした。僕らだって、タイミングが合えばいつでも付き合つて叫び出せるつもりでいた。

そう、タイミングが。

それだけが合わずに、いつもどちらかが言い出せず、どちらかが受け取れず、すれ違つてしまつただけで。

「のり君、足、逆」

「えっ、あ、」

次のパートナーの朱里が笑う。酔っ払つてゐる？と聞かれて、曖昧に笑う。無理矢理参加させた新郎が、前方でしどろもどろに踊つているのが目に入り、あれよりはマシだけどね、と朱里がつまらないフォローをした。

「凛子、取られちゃつたね」

「取られたつて、別に俺らは付き合つてたわけじゃ、」

「でも好きだつたんでしょう？」

どうして色恋沙汰になると女といふものはこうも敏感なのか。それとも僕の好意が駄々漏れで分かりやすかつただけなのだろうか。手を取つて内側へ傾く女性を支えて。

五組で作る小さな円で、僕らは曲に合わせてくるりと踊る。パートナーを次々と変え、ふわりふわり、と。同じ会社の、ふたつ先輩なのだという新郎は、少なくとも外見上は僕に似ていなかつた。交際から半年での結婚。僕は凛子を手に入れるタイミングを、今日こ

ここで永遠に失う。凛子。言わなかつたけど僕は君が好きで、君も僕を好きでいてくれたよね。

今でもまだ好きな彼女に送る、仲間としての余興は、けれど秘密がひとつあった。

三回目の中のサビが流れる、この次にくるパートナーで踊りは終る。ダララララララ、とピアノの鍵盤をかけ上がる指を想像させる曲の流れで。

後方に進んだ僕の手に、白いレースの手袋が触れる。肩を大きく露出させ、透ける白いベールを羽織り。ピンクと赤の薔薇で飾られた髪は、静かにカールして。

「……おめでと、」

「ふふ、と凛子が笑う。本当に、嬉しそうな色をにじませて。

「凛子、綺麗だな」

「やだ、照れるじゃないの」

いや本当に、と、僕は口の中でその言葉を転がして結局外に出さないままゆっくり笑った。レース越しに伝わる低めの体温。同じことを思ったのか、彼女がそつと言つ。相変わらずだね、と。相変わらず体温の高い僕、は、学生時代すぐに手が冷たくなる凛子の指先をよく握り締めて暖めた。缶コーヒーじゃ熱過ぎるしホッカイロ買うほどでもないし、私にはのり君がいるからそれでいいわ、と。彼女がよく笑っていたのを、昨日のことのように思う。

もう君は、僕以外の体温を求めるようになってしまったのかな。

右足、右足、左足、右足、男性が手を添えて右回りで女性をターンさせ、右足、右足、左足、左足を軸に円の内側へ女性が大きく傾いて手を伸ばし、倒れ込まないよう男性がその手をしっかりと支え。

曲が終つたら司会者が頼んでいた通りにわざと驚いた声を上げることになっている。『ご覧下さい！ 新婦は運命の人としつかりと手を取り合つております、やはり今日のふたりははじめから結ばれる運命だったのですね！』。

今回の余興は僕の振り付けを使うということ、仕切りは僕に任

されていた。最後の悪あがき、いや、意地なのかもしない。最後に新郎新婦がペアになるようにした、と告げてあるけれど、僕のふたつ前にいる彼に凛子との順番が回ってくるはずもなく。

曲の最後がハミングになる、僕は凛子と顔を見合わせてにっこりした。パチパチ、と酔っ払いもそうでない人も手を叩き始め、応用の利かない司会者が首を傾げつつマイクに向かって叫ぶ。

「ご覧下さい、新婦は運命の人としつかり手を取り合つております

」

あらやだ違う、と凛子が少しだけ慌てた様子で驚いた目を丸くしてけれど、僕は彼女の手を握つたまま離さなかつた。最後の悪あがきくらい、と。

「凛子、僕は本当は

「凛子の運命の人はオレだー！」

彼女の手を取つたまま、僕は最後の告白を試みようとする。けれど、その言葉は前方から発せられた声に遮られ、思わずそちらに目を向けると、大きく腕を開いた新郎がまっすぐ凛子に突進しようとするのが目に入つた。

ああ、僕は最後まで。

タイミングを失つたままで。

苦笑しか漏れない、凛子が楽しそうな声を上げるのが聞こえて、僕は泣きそうになる。最後まで僕は、凛子、君に。

凛子が大きく新郎に向かつて手を伸ばすのとほぼ同時に、けれども僕の目はサークルの仲間がさつとそれに足を出すのを捉えた。新郎に向かつて。田宮も、朱里も、早奈江も、由香子も鈴本も、今フォーアクダンスを終えたばかりのみんなが。さつ、と。

凛子しか見ていなかつた新郎は、そのうちの誰かの足につまずいて大きく体勢を崩した。

「逃げちゃえ、つて訳にはいかないけどさ、」

はしゃぎすぎた新郎がひとりで興奮していると勘違いしたらしい会場内から笑い声が起こる。

「もうタイミング逃したらこれが最後の最後なんだからねー...」

言つてくれたのは誰だつたんだろう。

僕は凛子の手を握つたまま、彼女の目を覗き込んだ。そう、今更の悪あがきだけれど。

「凛子 、」

オルゴールの結婚行進曲が流れる、式場内の壁にかけられた大きなからくり時計が、たくさんの花を咲かせて小さな新郎新婦の人形をぐるぐると踊らせはじめた。僕も凛子も、思わずそちらに目を向ける。合わせたように、タイミングぴったりで。

十五時、ジャストだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3791q/>

君の手を

2011年1月24日09時10分発行